

ジュール・ルキエの「クマシデの葉」

——翻訳と註釈

村 瀬 鋼

「僕は、どこから見ても、また少なくとも知性の面では、ごく普通の人間にすぎない。けれども、もし神がそれを妨げているのでなかったら、僕は、だれ一人、どんな人間でも強烈な電気ショックの情動なしには読めない、そんな一冊の本を完成させようと思う。」

—ジュール・ルキエ<sup>(1)</sup>

### ●解題——著者とテキストについて

ここにその翻訳と若干の註釈を提示するのは、ブルターニュの哲学者ジュール・ルキエ (Jules Lequier, 1814生-1862没) の、「クマシデの葉 [La feuille de charmille]」の呼称で知られるテキストである<sup>(2)</sup>。

翻訳の提示に先立って、哲学者自身と当該のテキストについてごく簡略に紹介しておこう。

ジュール・ルキエはサン＝ブリウ郊外のカンタン [Quintin] に生まれた<sup>(3)</sup>。父親は苦学して成功した医師であり、父親に出世の足がかりを与えた豪家出身の母親は、病人を献身的に看護する篤信家であった。家庭でも学校でも厳格なカトリックの環境のなかで幼少期を過ごしたルキエは、母親譲りの宗教的情熱をそのまま育んでいくことになるが、或る年長の友人の影響をきっかけに哲学と神学とへの興味を抱くようになる。1834年にはエコール・ポリテクニックに入学、後に新批判主義の哲学者として名声を得るシャルル・ルヌヴィエと出会う。二人は生涯の友人となり、ルヌヴィエは、ルキエ死後の1865年に、自ら「私の師」とさえ呼ぶこの友人の遺稿を『第一真理の探求 [La recherche d'une première vérité]』というタイトルのもとに編纂・公刊することになるだろう。

さて、その後のルキエの人生は曲折に満ちたものである。彼は、生来の熱情的気質と哲学・神学への傾倒のために学校での学問に次第に違和感を覚えるようになり、参謀部実習学校に進むのだが、そこでもまた環境に馴染めずに、最後には卒業試験を拒絶して出奔するに至る。やがて、父親の不意の死を一つの契機として暫くサン＝ブリウに引き籠るが、1843年にパリのエジプト人学校での教職を得て移動、パリ滞在中の1846年8月に、教会で一種の神秘的合一にも似た宗教的体験を持つ。その前後の1845-46年に、ルキエは自らの哲学体系のまとまったスケッチを含む一群の草稿を執筆している。1848年にはブルターニュに戻り、カトリック共和主義者として代議士に立候補するが、周囲に受け入れられず落選。以後、ブレランの別荘に隠棲して孤独のうちに著作に没頭する。ルキエ自身の著作計画の第一巻にあたり、ルヌヴィエ編の『第一

『真理の探求』の最初に収められている「知の問題 [Le problème de la science]」の草稿は、この時期の1850-51年に執筆されている。1851年2月に、ルキエは、恐らくは恋人アンヌ・デジルに求婚を拒否されたことが引き金になって精神の変調を来たし（ルキエは斧で自分の腕を切り落とそうとした）、病院に運び込まれる。だが、暫くの静養を経て著作は書き続けられ、『第一真理の探求』の後半を構成している「自由意志の観念の表示」は、1860年頃までに（その間、1853-55年にはブザンソンで数学の教職に就いている）ほぼ完成近くまで仕上げられる。しかしながら、これらの草稿のどれも、ルキエ生前には公刊されるに至らなかった。哲学的厳密さと文体的完成を極度に求めたルキエの性向が、著作の完成を妨げ、未完成なものの公表を控えさせたからである。最晩年、ルキエは宗教的情熱を昂じさせる一方で、孤独と赤貧に苦しめられ、ついには、デジル嬢への再度の求婚（以前の拒否の理由になっていた彼女の父親が死んだのを機になされた）を拒絶されたことが恐らくは決定的な一撃となって、1862年2月の或る日、ルキエは冬の海に飛び込んで沖へと泳ぎだし、帰らぬ人となった。

ルキエの哲学の一般的な狙いは、キリスト教の教義を自由の形而上学によって読み解くところにあると言えるだろう。その哲学体系は、「自由を結合点とする一つの鎖の同数の環である第一次的な諸真理全体」（CE, p. 343）から成るもの、「自己に基づくものである自由という最初の環を除いては互いに訴えあう諸原理の、一連鎖」（CE, p. 342）として構想されていた。「自由」がルキエの哲学の特異点であり、これは、科学が想定する決定論と神学が語る神の摂理とがともに要求する、いっさいの諸事象の「必然性」、これとの不断の緊張関係に置かれている。ルキエの課題は、信仰を損なわない仕方です人間の自由意志の実在性を肯定すると同時に、自由意志の存在から発して知と道徳と信仰とを基礎づけることにあった。その最初の一步、つねに反復される最も基本的な一步は、必然性に抗して自由を肯定すること、自らの自由そのものによって自由を肯定することにある。

十九世紀のフランス哲学の流れのなかでは、ルキエは孤高の、或いはむしろ孤立した哲学者だったと言うべきだろう。ルキエは、時代的にはいわゆるスピリチュアリズムの流れに棹さす場所に位置しているかは一見思われるが、この流れの源とみなされるメヌ・ド・ピランを読んでいた確かな形跡は見られず、ピランの不忠実な継承者である当時のいわゆる「折衷主義 [éclectisme]」の哲学者たちからも距離を置いていた。やはり同時代的であったコントの実証主義に関しても言及はなく、明白な影響の痕跡も見られない。またルキエは様々な類似点からしばしばキェルケゴールと比較されるが、同じく孤高の思想家であった同時代のこのもう一人の哲学者との間には、ど

んな実際の影響関係も認められない。近い時代の哲学者でルキエが共感を示しているのは第一にはフィヒテであり、次にはカントであるが、ルキエは、自由についての彼らの見方から得たものはあっても、これらドイツの哲学者たちの流れを汲んでいるとまでは言えないだろう。むしろルキエは、もっと大きな時代の幅のなかで思考していた。ルキエが思考の資源とするのは、聖書であり、また、自由意志や神の摂理や時間や永遠についてのスコラ哲学の諸議論であり、さらに、フランス哲学のなかではパスカル、そしてそれ以上にデカルトである。ルキエの著作の文体もまた多彩であって、ルキエは或るときにはパスカルのように呻きながらデカルト的な省察を繰り広げ（「知の問題」）、或るときにはスコラ哲学風の対話篇に議論をのせ（「自由意志の観念の表示 第一の表示 プロピュ」）、また或るときには高雅な文体の聖書風の物語に観念を受肉させる（「自由意志の観念の表示 第二の表示 アベルとアベル」）。

後代へのルキエの影響としては、まずルヌヴィエへのそれ、またルヌヴィエを経由してのウィリアム・ジェームズへの影響が挙げられるが、その内実は恐らく自由意志の根源性という一点に尽きると思われる。ジェームズと親交があり、やはりルヌヴィエの著作を介してルキエを知っていたと推測されるベルクソンには、自由をめぐってルキエのそれと類似した議論も見られるが、ルキエへの明示的な言及はなく、取り立てて影響関係を言うのには無理がある。やや後の比較的実質的な影響としては、1920-30年代のルイ・デュガやジャン・グルニエらによる紹介の仕事を契機にした、ジャン・ヴァールやサルトルなどいわゆる実存主義の哲学者たちへのそれがある。特に、ルキエの遺稿を精査して公刊する<sup>(4)</sup>のとあわせて浩瀚なルキエ研究<sup>(5)</sup>をまとめ、後には最初の（またいまのところ最後の）ルキエ全集<sup>(6)</sup>を編纂することになったグルニエの仕事は、ルキエの名を知識人の間に広く知らしめるのに大きく寄与したであろう。ヴァールはルキエのアンソロジー<sup>(7)</sup>の編者として長い序論を書き、他のところでもルキエに多数言及して論じているのに対して、ルキエの名を挙げることすらなかったサルトルは、ルキエ自身を十分読むことはなしに、主にグルニエのルキエ研究で知った「なすこと [faire]」と「自らをなすこと [se faire]」についてのルキエの公式を自分の哲学に借用したにすぎなかったのが実情であろう。だがともかくも、実存哲学の隆盛の時期に、ルキエはフランス哲学に遅ればせの花押を刻印しているように思われる<sup>(8)</sup>。乱暴さを承知であえて一つの線を引いてみようとするなら、例えば、サルトル的な「対自」の定式にその一典型が見られるような、現在の瞬間において不在の過去と未開の未来との間で引き裂かれている「私」という主題——デカルトがそのコギトの瞬間性によってただ陰画としてのみ示したもの、メーヌ・ド・ピランでは静態的な心身の二元性の構図に収まっていたもの——は、ルキエがそれを最初に明晰に

捉えて、二十世紀フランス哲学での反復的な展開を準備したものと看做されるかもしれない。

ルキエが計画していた著作は、ルヌヴィエが伝えるところでは全八巻に区分される<sup>(9)</sup>大部のものになるはずであった。そのうち、実際に執筆されて相当程度まで完成に近づいたのは、第一巻の『知の問題（或る第一真理をどう探し、どう見つけるか？）』（ただし「序論」を除いて「第一部」から「第七部」までは欠落部分も多く、完成度はさほど高くない）と第八巻の『自由意志の観念の表示』（特に「第一の表示」の一部と「第二の表示」の「アベルとアベル」は極めて完成度が高い）のみである。これらはルヌヴィエ編集の『知の問題』に収められているが、どれもルキエ生前には公刊されるに至らなかった。

以下に取り扱うテキスト「クマシデの葉」は、1850年に書かれたと推定されるもので、ルキエが生前唯一公表した、ルキエの最も著名かつ代表的なテキストである。ルキエの名を知る人々の大多数は、実は、このテキストによってこそ、或いはこれによってのみ、ルキエを知っていると言ってもよい。「クマシデの葉」は、一つの哲学的エッセーとして単独で読まれうる完結した形式をもっているが、ルキエの死後、遺稿に記された構想にもとづくルヌヴィエの編集によって、『第一真理の探求』の冒頭、より詳しく言えば、『第一真理の探求』の最初の部におかれた「知の問題」（「第一真理をどう見つけよう探すか」という副題を付す）の「序論」に配されている。ルキエはこのテキストを、友人たちに写しを配布するという仕方でも、自分自身の作品として生前ただ一つ公にした。このことは、みずからに厳しかったルキエがこのテキストに置いていた信頼と自負とを物語っている。実際この特異なテキストは、ルキエの思索の出発点を示すものであるとともに、『知の問題』の全行程を凝縮して含むもの、さらにはまたルキエの哲学全体の核になるものともみなされるのである。以下、その試訳を提示する。テキストについての注釈は、ここまでの註に続けて文末脚註として本文の後に置いた。

\*

## クマシデの葉（「知の問題」序論）

ジュール・ルキエ

形而上学のことでは、何も読んだことのない善良で賢明な労働者でさえ、ひとりの子供にはかなわないと私は思う<sup>(10)</sup>。その数々の問いには本当にびっくりする！ その問題の立て方は、なんとまあ大胆かつ正確、単純かつ深遠なのだろう！ ひとの答えに耳を傾けるときのその熱心さと辛抱強さときたら！ そしてしばしば、答えを理解できなくて、どんなに素直に残念がることか！

不幸にも、大人になると、子供は数々の長所と一緒に、謙虚さを失ってしまう。それは彼の罪ではまったくない。言語が彼を騙し、先例が彼を拐かし、権威が彼を虐げる。ひとは彼の美德を利用して彼を誘惑するのであり、彼は、ひとの教える誤りに、真実を約束してくれた人々に捧げる全愛情でもって気持ちを注ぐのだ。私もこの共通の法則を被ってきたわけであり、忘れてしまわなければならない学んでしまったことが、私にはたくさんあるにちがいない<sup>(11)</sup>。だが、これらの大きな問い、自由意志と神とについての問い<sup>(12)</sup>に関しては、学者たちの理屈も決して、私をどうにもできなかった。ひとは私に、長々しい様々な説明を豊富に与えてくれた。私は子供のようにふるまった。耳を傾けたが、ちっとも理解できなかったのである。諸々の論証や知識は、二つの真理の調和を証明しようとしながら両者をかわるがわる無に帰してしまっていた。これに対して、私の貧しさは、少なくとも両者を無傷に保たせてくれた。結局、これらの論証や知識の豪華さと、私の誇り高い貧しさを比べ合わせて、私は、自分の最も古い思い出の一つが、自分にと

っては、最も教えに富む思い出の一つでもあることを、認めるにいたったのである。

決して忘れない子供時代のひとときがある。一つの考え、一つの心の動き、一つの、しばしばありふれた情況に、注意力が力強く集中してきて、この注意力が、思いがけない晴れ間<sup>(13)</sup>から、我々に内的世界の豊かな眺望を開く、そんなときだ。反省が遊びを中断し、他人の助けなしに、ひとは初めて思考を試みた。

或る日、父の庭で、クマシデの葉<sup>(14)</sup>を手にとろうとした瞬間、それはまったく何でもない行動であったのだけれども、私は突然、自分がこの行動の絶対的主人であるのを感じて素晴らしい驚きに捉えられた。なすか、なさぬか<sup>(15)</sup>！ どちらもがこんなにも等しく私の権能のうちにある！ まるで私が二重であるかのように、私、という同じ一つの原因にあって、まったく対立した二つの結果が同じ瞬間に可能なのだ！ そして、どちらの結果によっても、私は何か永遠なものの作者となる。なぜなら、私の選択がどんなものであれ、私がそう決める気になったことが持続のこの地点で起こったということは、以後永遠に真であることになるはずなのだから。私の驚きは私の手にあまった。私は手を引っ込めては差し出し、引っ込めてはまた差し出した。心臓が早鐘のように打っていた。

枝に手を置こうとしていたそのとき、葉叢からの微かな音に、私は目を上げて手を止めた。私は知らずして、無邪気に或る存在様態を創り出そうとしていたのである。

鳥<sup>(16)</sup>が一羽、怯えて逃げ出したのだ。飛び発つことは、減びることだった。通りかかった鷹が中空で鳥を捕まえた。

自分が引き渡したのだ、悲しみにくれて私は心に眩いた。他の枝ではなくこの枝に触れることにした自分の気紛れが、あの鳥の死をひきおこしたのだ<sup>(17)</sup>。それから、年相応の言葉で（いまの私にはもう思い出せない無邪気な言葉で）私は続けた。すると、これが物事の連鎖というものなのだ。皆がどちらでもよいと言う行動<sup>(18)</sup>は、その射程が誰にも気づかれていない行動のことなのであり、無頓着になってしまうのは無知のせいではないのだ。自分がなそうとした最初の運動が、自分の未来の生活の何を決めることになるのか、いったい誰が知ろう。きっと、一つ一つの情況ごとに、自分の人生全体が違ったものになっていき、後々には、最も些細な物事を無数の媒介によって最も重大な出来事に結びつける秘密の繋がりのおかげで、皆が静かに耳を傾けている夕べ、暖炉のそばで、父がかぎりない敬意をもってその名を口にするあれらの人々の好敵手に、やがて自分はきっと成るのだ<sup>(19)</sup>。

ああ思い出の魅惑<sup>(20)</sup>！ 大地は春の炎に燃えたち、さまよう虫の羽音が径々に鳴りわたっていた。開きそめた花々はまるで息づいているようで、萌えはじめた緑、芝生や苔は、数えきれないほどたくさんのださまざまな客人たちでにぎわっていた。数々の歌、叫びが、出産の床にある大地の鈍いざわめきの上に間をおいて際立つのであったが、それらに乗せている大地のざわめきは、とてもたゆみなく、あまりにも強烈で優しかったので、樹液が枝から枝へとめぐり遠く生命の源泉で湧きだっているのを耳に聞かかと思うほどだった。これらの花々、この緑、この芝生、この苔を前にして、これらの歌、これらの叫びに、私はなぜかしら、こんなことを想像した。自分の思考から、最もひよわな存在の最も微かな震えまで、いっさいが、それらの各々のなかに孤立した脆くて漠とした感情の数々を集めて一束の力強い光をかたちづくりながら、自然のただなかで、世界の心臓であり意識の意識である或る



深い中心で、鳴り響こうとしているのだと。そしてこの自然は、私の苦悶に感じて、無数の仕方で私にこう告げようとしているように思われた。すべての音は言葉であり、すべての動きはしるしであると。老木のもとに佇んでいた私は、その老木を、不安と一種の敬意とをもって眺めていた。とそのとき、風が立ち、老木はその白髪<sup>(21)</sup>を傾けてゆっくりと揺すった。自分がその爪に立ち向かっている猛禽とは、いったいどんなものなのか<sup>(22)</sup>、と私は心に呟いた。自分が準備を進めている栄光の運命とは、いったいどんなものだろう。それでも私は、手を伸ばし、運命の葉をつかんだ。

だがもし、現在のこの決定は、一連の出来事を開始しているのではなく、過ぎ去った一連の出来事をもう一つの出来事によって継続しているのだとしたら<sup>(23)</sup>？ そしてその一つの出来事は、何か私より優れた或る存在にとっではずっと以前から確実だったもので、自分がなしたわけではちっともないこの一般的順序のなかでその時機に逢着しただけのものだったとしたら？ もし、自分の心奥で自分を主権者だと感じる事が、実は、自分の依存性を感じないでいるということではなかったとしたら？ もし、自分の意志の一つ一つは原因である以前に結果であり、それゆえ、この選択、この自由な選択、見かけ上は偶然と同じくらい自由なこの選択は、本当は（偶然などいっさいありはしないのだから）、先立つ或る選択の不可避的帰結であり、そのもう一つの選択はさらにもう一つの選択の帰結であり、こうしてどこまでも同じようにして、自分が何の記憶も持ち合わせていない時代にまで遡っていくのだとしたら？ 私の気持ちでは、これは啓示的な一日の悲しみに満ちた夜明けのようなものだった。一つの考え…。ああ！ なんて考えた！ なんて光景だ<sup>(24)</sup>！ 私は目が眩む。今日の大人は、子供が体験したこの並外れた動揺を思い出すことで、この動揺を再び体験する。私はもう、子供の苦

悶と大人の苦悶とを区別することができない。同じ考え、恐るべき、抗いがたい考えが、思考のあらゆる領域とあらゆる出口とを占めてその明晰さで私の知性をいっぱいにする。この情動の葛藤をどう描けばよいのか、私にはわからない。

連続的に変容する一つの連続的な運動で動かされているこの広大な世界、刻一刻、先立つ事態のなかにその存在理由をもたないものは何も産み出されないこの広大な世界の一点で、私は自分の思い出の彼方に自分を見た。私は自分の起源に自分を見た。自分を、自分であったこの新生児を、私の存在を開始したこのよそよそしい私を。私はその私が、それ自身の知らぬままこの宇宙の一点に配置されているのを見た。この不可思議な芽は、自身の本性と自身をとりまく複雑な環境の本性とが含んでいたものに年月を経て成っていくよう、定められているのだ。それから私は、自分自身の記憶の展望のなかに、自分の未来の人生の想定された展望を延長してみた。すると私は、一連の様々な人物へと増殖して私に現れてきた。それらの人物のうちの最後の者が、いまわの際に、残りの者たちの方に振り返って、なぜそんなふうになるまったのか、なぜそんな考えに心を決めたのか、と問うたとしたら、彼は、彼らが次から次へと代わる代わる他の者たちを呼び出していくのを聴くことになるだろう。よく考えよう、自分がこれから何をするのか見きわめよう。行為する瞬間にそんなばかばかしい言葉を呟くことの錯覚を、私は理解する。よく考えてみても無駄なこと、自分の熟慮を用いて自分の行為の作者になることは私にはできないのだし、それどころか自分の熟慮を用いて自分の熟慮の作者になることすらできないのだ。もし私が自分の力の感情をもっていたとしても、そして実際、以前私は、自分固有の力の感情をやっばりもっていたのでもあるが、もし私がそんな感情に満ち溢れるときがあったとして

も、それは、普遍的な潮の満干を維持している或る力を、その通過の時点で自分のうちに感じていたということ、その力がその波の一つで私を浸したということではかないのだ。私は認識した。私は私の原理ではないのだから、何の原理でもないのだと。私の欠点と私の弱点は、なされてしまっているということだ<sup>(25)</sup>。誰であれ、なされてしまっている者は、なすという高貴な能力を剥奪されてしまっている。崇高なこと、奇蹟ですらあること、そして悲しいかな！不可能なことは、行為するという事<sup>(26)</sup>だ。私のうちのどこでも、どんなふうにでも、とにかく行為すること。最初の動きを与えること、最初の意志を意志すること、何らかの仕方では何かを始めること（もし私に何かができているなら、いったい私に何ができなかったろう！）、一度でも自分の指揮で行為すること、要するに、行為するという事、これだ。そして、もしそんなにも素晴らしい特権を所有していたら得ていたはずの喜びを、幻滅の苦しみよって感じながら、私は、自分が或る種の観客の役目に切り詰められているのに気づいた。その観客は、私なしに私のうちで描かれる移り行く絵によって、代わる代わる楽しませられたり悲しませられたりするものである<sup>(27)</sup>。その絵は、私自身と世界とを、つねに多義的な<sup>あいまい</sup>外観のもとに、ときには忠実に、ときには偽って示しているだろう。その私はいつも信じやすく、現在の自分の誤りを疑ってみることも真理をひきとどめておくこともできない。いまや私の目にはこんなにも明瞭な或る真理、すなわち、誤りを捨てようとしても、あらたなもう一つの誤りによって無益で不可避な努力を試みているだけなのであったとすれば、私はどんな誤りからも決して身をとくほどくことができない、というこの真理をさえ、私はひきとどめられないのである。ただ一つの、いたるところに反射するただ一つの考え、一様に輝きわたるただ一つの太陽。私のなしたことは必然的であったということ。

私の考えていることは必然的であるということ。何であれそれがこの瞬間にそのあるがままの仕方存在していることの、絶対的な必然性。これは途方もない帰結を伴うものだ。善と悪とは一緒であり、同じ幹の同じ樹液から生まれた果実として、相等しいものだ、という帰結を<sup>(28)</sup>。私の全存在に逆らうこの考えに、私は悲嘆と恐怖の叫びをあげた。クマシデの葉は私の手を逃れ、私は、知恵の木に触れたかのように、泣きながら頭を垂れた。

突然私は頭を上げた。推論もなしに、躊躇<sup>ためらい</sup>もなしに、神にかたどって創造され神に従うべきであるゆえに神に抵抗しうる自分の魂がもたらしてくれる内的証言以外には、自分の本性の卓越性についてのどんな保証もなしに、自分の自由への信仰を自分の自由そのものによってつかみなおして<sup>(29)</sup>、私はこのうえなく確実な安心のうちで、自分にこう言ったのだ。そんなことはない、私は自由だ、と。

そして、必然性の妄想は消え去った。夜のあいだ暖炉の光と影との戯れからつくられるあの亡霊たちのように。不意に目をさましてまだなかば夢中に迷っている子供を、亡霊たちは、その燃えさかる目で見すえ、恐怖で射すくめる。子供はその魔力に加担して、その魔力を自分自身が視点の固定性によって維持しているのを知らずにいるが、魔力を疑いはじめるや、子供はそれを、思い切ってなす最初の運動で、ただの一瞥で消し去るのである。

【註】

- (1) 恐らく1850年のものと思われるルヌヴィエ宛書簡の一部 (CE, p. 543)。
- (2) 原文テキストは、以下の三点に所取のものを参照した。①グルニエ版の『全集』(Jules Lequier, *Œuvres complètes*, éd. par Jean Grenier, La Baconnière, 1952—以下、出典指示に際しては CE の略号を用いる)、②エクラ社刊の『第一真理をどう探しどう見つけるか』(Jules Lequier,

*Comment trouver comment chercher une première vérité*, éditions de l'éclat, 1985), ③クレール編の『第一真理の探求』(Jules Lequier, *La recherche d'une première vérité*, éd. par André Clair, PUF, 1993——以下, R の略号を用いる)。以上三者間でテキストの異同はない。本テキストの最初の(ルキエ自身による少数読者内での回覧ではない)出版であるルヌヴィエ版(*La recherche d'une première vérité*, Sait-Cloud, Imprimerie Belin, 1965——これは販売すらされなかった120部のみの私家版であるが、「クマシデの葉」の部分に関しては、その後ルヌヴィエの自著のなかにも収録されている)は、筆者未見であるが、上記三者収録の当該テキストはルヌヴィエ版と同源であるかルヌヴィエ版を踏襲するものであるから、そこにも異同は想定されない。

尚、一般に用いられているルキエ Lequier という姓は、ルヌヴィエの採用した綴りを踏襲したもので、哲学者の出生証明書にも見出されるものだが、いくつかの公文書には Léquyer とも記されている(読み方は片仮名表記では「レクイエ」に近いだろう)。

- (3) ルキエに関する伝記的事実は、主にエモン(Prosper Hémon, 1846-1918)の「Notice biographique」(Jules Lequier, *Abel et Abel*, éd. par Gérard Pyguille, Éditions de l'éclat, 1991に収録)によって知られる。これは長らく未公開のままルキエの手稿とともにレンヌ大学図書館に保管されてきたものである。
- (4) Jules Lequier, *La Liberté*, Textes inédits présentés par Jean Grenier, Vrin, 1936.
- (5) Jean Grenier, *La philosophie de Jules Lequier*, Les belles lettres, 1936.
- (6) op. cit.
- (7) *Jules Lequier 1814-1862*, introduction et choix par Jean Wahl, Trois Collines, 1948. これは Bernard Groethuysen が創設した「Les Classiques de la Liberté」叢書の一冊である。
- (8) その刻印の銜として、グルニエの教え子でもあったカミュの『シーシュポスの神話』(1942年)の冒頭からすぐの箇所に、自殺の実験者としてのルキエへの省略的な言及が見られる。また、時代は下るけれども、アンドレ・ブルトンの『ナジャ』(全面改訂版, 1963年)の「序言」にも、もう一つの別の銜を聞くことができる(「[...]何か決まった仕方で相互に繋が

りあう些細な出来事同士の、日ごと日ごとの可能なかぎり非個人的な関係（ルキエのクマシデの葉よ、いつもおまえを思う！）[…]]。

- (9) ルヌヴィエが『第一真理の探求』に付した序文の記述を参照（R, p. 6）。  
 (10) « j'oserais mettre un enfant au-dessus même d'un bon et sage laboureur ». 直訳的には、「善良かつ賢明な労働者（と比べたとしても、そんな労働者）よりもさえ、私は子供をあえて上におくであろう」。ここでの「労働者」と「子供」との位置関係は注目に値する。さしあたり、（例えば学者等ではなくて）「労働者」が「子供」との比較項になっているのは、一見奇異に移るだろう。だが実は「労働者」は、ルキエにとって哲学する主体の一つの代表格なのである。

ルキエは、学知を真理探究に不可欠なものとしなす当時の支配的哲学者たち（いわゆる「折衷主義者たち *éclectiques*」）を批判して、少なくとも真に根源的な諸真理は学者や哲学者の特権的専有物ではなく万人にとって接近しうるものだと主張する。「ひとは、哲学を始める前に、自分の用いる方法と諸能力とについてみずからに説明しておこうとする。人々は、この見事な方法のおかげで、万人の領域のものである諸真理 [les vérités qui sont du domaine de tous] には事実上けっして到達できないという不可能性のなかに置かれることになる。これは違う。そうはなっていないのだ。強力な本能が我々に何より先に教えてくれるのは、真理の発見は学者のと同様に炭焼き人の手の届く範囲にある、ということだ」（CE, pp. 342-343）。「宇宙についての諸学問、自然学や数学は、好奇心の、有用性の学問である。真の哲学は、別の性格、それ固有の尊厳ある性格もっている。そこで何よりもまず、真の形而上学は万人の領域のものである少数の諸真理に還元されるとみなすべきである。これらの諸真理は、熟練した学者と同様に炭焼き人もまた発見しうるものである。それは、炭焼き人は一人の人間であり、一人の人間という資格で真理への権利を持っており、神は真理を彼の手の届くところに、いわば彼の手に置いたはずだ、というただそれだけのことによってそうなのである」（CE, p. 344）。「ひとは言う。哲学を企てるまえに、まず 1) 学問とは何かを知ること、2) 哲学の対象を認識すること、3) 用いる方法を認識すること、4) 心理学的意識とは何かを自問すること、5) 魂と身体と物理的世界とを区別すること、が必要であり、それは最終的には、1) 物理的作用者、2) 諸器官に産出される生理学的印象、3) 身体に対する魂の反応、を研究するためである、と。／

ひとは間違っている。なぜなら、1) 哲学とは自然学等々の専門的学識の学問ではまったくない。だれしもが哲学をなしうるのだし、しかも学問的に進めていく必要なしに哲学をなすのである。そして真の哲学とは、魂においてたいへんな苦勞をしないと区別できない諸々の細部や諸々の事実についての学問ではない。そんなのは真理探究とは別物なのだ。そして自分自身に自分自身を説明したいと思う人間が自分に立てる最初の問いは、自分の主張することを主張する権利を自分に与えてくれるものを知ることに関わっている。2) だから彼は、真なるものに到達するためにどんな方法を用いたらよいかなどと問おうとはしないだろう。彼が自分に立てる問いはこうだ。《私は存在する》という主張、あるいはこれに類する他の主張を正当化してくれるものは何か？ そして彼は、気づいたと信じた過誤の数々の原因がいつでも自分を欺いていることがありうること、最終的に、自分の主張することをいつまたなぜ信じるべきなのかを知る必要があること、これを確認した後で、この主張を掘り下げるだろう。3) 物理的諸要因を研究すること、つまり自然学を行なうこと、身体内に産出される生理学的諸事実を認識すること、つまり生理学を行なうことが、何より先に必要だと語るのは、哲学が万人の領域のものであることを否定することである。それは、哲学に触れる以前に諸学問の円環を巡り終えていることを要求することだ。これは人間の尊厳に対する侮辱である。というのは、もし真の哲学が、真なるものに到達して真理を説明することを目的としているのなら、哲学は万人の領域のものでなければならないからだ。なぜなら、万人が真理を発見しうるものでなければならないのだから。そして或る強力な本能が何より先に我々に言う。各人は、自分の反省だけでもって、自己と自分の諸主張について自分に説明できる、そんな具合に創造されたはずだ、と》(CE, pp. 338-339)。

かくてルキエは、「書物を読んだことのない善良で賢明な労働者」たる「炭焼き人」(フランス語の charbonnier は、一般に、まさに無学で素朴な野人を言い表す言葉でもある)を、「学者」同様に真理への権利を持つ者として評価するのであり、しかも、学問的見識への固定観念には無記な者としては「学者」以上に真理に近づきうる者として評価しているのだと言える。ちなみに、そのような「炭焼き人」が採用すべき唯一の方法とは、ルキエによればデカルト的な懐疑なのであり、これこそがまた、「知の問題」でルキエ自身がまず採用する方法でもある。「真の方法、自然な

方法とは、いっさいを疑うことだ」(CE, p. 342)。

しかルキエは、この「序論」では、そのような「炭焼き人」にもまして、「子供」をこそ形而上学の理想的な主体として立てているのである。またルキエの著作計画のなかでは最終巻の第八巻のなかに位置づけられる『アベルとアベル』は、それ自身二人の子供の物語であるとともに、その冒頭に「子供に」と題された文章が付されている。「子供」とは、ルキエにとって、いわば一つの特権的な概念的人物 (un personnage conceptuel) なのであって、或る意味では、ルキエの企ての全体が、子供の視点からの子供に対しての語りかけであるとも言える。

- (11) « j'aurais beaucoup à désapprendre ». 文脈は別ののだが、筆者がつい最近偶々目にした例として、鶴見俊輔は、ヘレン・ケラーから直に聞いたという « unlearn » という言葉を、「型通りにセーターを編み、ほどいて元の毛糸に戻して自分の体に合わせて編みなおす」というイメージで「学びほぐす」と訳している（『鶴見俊輔さんと語る』、『朝日新聞』2006年12月27日朝刊）。だが、語自体としてはこの « unlearn » に近いルキエの « désapprendre » は、「編みなおす」ことではなく、むしろ、編まれたものをたんにほどいてしまうこと、大人に教え込まれたものをすべて捨てて子供に戻ることを意味しているであろう。
- (12) « ces grandes questions du libre arbitre et de la Providence ». 大文字イニシャルで記される Providence とは「神」のことであるが、原義は「(神の) 摂理」, 「神慮」, ないし「予見 (前に一見していること providence)」。解題で触れたように、神には既決のこととして眺められているはずの出来事系列のなかで、いかにして自由な行為が可能なのか、という問題が、ルキエにとって第一かつ最大の問題であった。一般的な言い方では、「決定論と自由」とも言い換えられうる。
- (13) « une échappée inattendue ». inattendu の語は、直前の「注意力 attention」と響き合っている。
- (14) « une feuille de charmillle ». 「クマシデ」と訳した charmillle は、より正確には charme (カバノキ科の落葉広葉樹クマシデ、ないしクマシデ属の樹木) の苗木、ないしは生垣のことである (-ille は指小辞、または集合を示す接尾辞)。後段に出てくる「老木」という言い方がもし charmillle (の一部) を指しているのだとすれば、生垣としてのそれを想像するのが適当であろう (ただし、この仮定自体、正しいとはかぎらない)。



ところで, *charmille* に含まれている *charme* は、「魅惑, 魔力」の意の *charme* という同綴の語をおのずと連想させる（ただし, 二つの *charme* は語源的には何の関わりもない）。文章の彫琢に碎心したルキエが, この語感を意識していなかったはずはない。恐らくは, 一つの創作としてはどんな樹木を持ってきてもよかつたはずのところではルキエが特に *charmille* を選んだのは, たんに自らの事実上の思い出への忠実さゆえではなく, この含みを念頭に置いてのことと考えた方がよいだろう。他方, 「クマシデ」という訳語を考えると, この訳語が以上のような *charmille* の語感をうまく移しえているとは思われない（一般に「シデ」は日本では宗教的行事との関わりが深い樹木であり, 神秘的ないし神的な雰囲気をもとつかせている, ということはあるにしても）。ただ, 訳し手の恣意的な選択で樹木の品種を変えてしまうわけにもいかないので, ここは「クマシデ」と訳しておくほかはあるまい。なおまた, *une feuille* であるから, 正確さを期すならクマシデの「一」葉と訳すべきかもしれない。

- (15) « Faire, ou ne pas faire ! » ここで *faire* とは「為すこと, すること」でもあれば「成すこと, つくること」でもある（ちなみに Donald Wayne Viney による英訳著作集 *Translation of Works of Jules Lequyer*, Edwin Mellen Press, 1998 では, このくだりは « To do or not to do ! » と訳されている）。

ところで, ルキエが『知の問題』の結末部で提示するいわゆる「知の公式 [la formule de la science]」——ルキエでの「私」にとっての最終的かつ最根源的な「要請」と言えるもの——は次のようなものである。「〈なす〉こと, / なるのではなく, なすこと, そして, なすことで, 〈自らをなす〉こと [FAIRE, / non pas *devenir* mais faire, et en faisant SE FAIRE]」(CE, p. 71 ; R, p. 72)。大文字で書かれた最初の一語は, 改行された後続の部分とは区別された特別の位置に置かれているから, この「公式」の核心は「〈なす〉」の一語にあると言ってよい。あれかこれかの選択の力能を含意し, さらにあれをなすかなさぬかこれをなすかなさぬかという多重化された選択をひとに思考させる「なすか, なさぬか」は, 端的な遂行でありその要請であるこの「なす」に根づいている。前者の選択能力は後者の遂行能力に基づいており, 前者の逡巡は自由の肯定そのものである後者の遂行によって解決される。この両者の関係については, クレールがとりあえずの見取り図を与えてくれている (André Clair,

*Métaphysique et existence*, Vrin, 2000, pp. 72-73)。

- (16) 原文はたんに *oiseau* なので、たんに「鳥」と訳しておいたが、もう一羽の鳥（「鷹」）との区別を明瞭にするためにはあえて「小鳥」とでも訳した方がよいかもしれない。ここから問題にされていくのが、些細なことが次第に重大な帰結を引き起こしゆくという事態であるということも考えあわせるなら、それは悪くない選択でもあろう。
- (17) ルイ・デュガが報告しているルキエの「クマシデの葉」の下書き断片によれば、この一連の部分は、公表に先立つ或る草稿では、当初、鳥の死の原因としての「私」の介入が表立てられることなく、以下のように、事象の連鎖一般を問題にするかたちで展開されていた。「一羽の鳥が、一本の弱々しい（細い）枝の先にとまっていた。鳥は、翼をはためかせながらしばらくの間そこにつかまっていたが、やがて努力に倦んで、飛び立った。通りかかった鷹が中空で鳥を捕まえた。／もしあの鳥が、私は心に咬いた、もう少し（もっと）勁い枝にとまっていたら、枝は鳥の重みで震える（撓む）ことはなかっただろうし、鳥は枝を発たなかっただろう。鷹は鳥に気づかぬまま通り過ぎていたにちがいない。それから、年相応の言葉で、云々」（Louis Dugas, « *La Feuille de charmille* de Jules Léquyer », in *Revue de Métaphysique et de Morale*, 1914, n° 2, p.157)。
- (18) « action que tous appellent indifférente ». indifférent(e) は、数行後の「自分の人生全体が違ったものになっていき」というくだりの「違ったもの différent(e)」と呼応している。
- (19) 私の現在の自由な行為の些細な差異が事象系列を経てもたらす、未来の私の在り方における巨大な差異。このような、現在の自由な行為が未来に開く可能性の巨大さについては、『知の問題』「第三部」で、今度は可能な選択と可能な未来との多数性、そしてまた他の人間たちの自由な諸行為との絡み合いをも視野に入れるかたちで、展開されている。「[いっさいを必然的とみなすのとは] 反対に、私のうちでかくも強力なもう一つの本能に合わせて、実際に人間は自分が行為するのは別様に行為しうるのだと認めてみよう。時間が、なんと広大な進路を可能的なものに開いてくれることか！ たとえ限界内でだとしても、自分固有の感情を随意にし、その程度を自分自身で定め、自分の思考の圏域内のそこここで或る考えを別のすべての考えに勝らせることでためらいに終止符を打つ、そんな一つの権能を人間に帰属させるなら、同じ瞬間にいかにもたくさんの異なった行動が彼

には可能だとは思われないか？ 彼が自分の力の行使に備えつつ取り囲まれているこの変りうる地平のなかで、自分の勇気、善にも悪にも用いられているその勇気の高みにまで持ち上げられたこの視点において、選べるとすれば選びとりうるどれだけ様々な展望が、そしてこの様々な展望のなかで注視しうるどれだけ様々な地点があることか？ しかし、同じ一人間にとって同じ一瞬間において可能な行動のこの多数性も、一人の、複数の、また全ての他人たちの行動と結合されたこの人間の可能的行動から帰結する出来事の多様性、こうした結合をも結合して想像も及ばぬほどの数にまでもっていく時間の不断の歩みによってさらに多数化されたこの多数性と比べれば、いったい何だろう？ 何年かの間、何世紀かの際に、世界の歴史にはどんな可能な違いがでてくることか？ そして、ここがこの可能な多様性の極限なのだ、などといった誰が言えようか！ しかしこれは本当に可能なのか？」(CE, pp. 48-49 ; R, pp. 48-49)。

- (20) « charme des souvenirs ». 先註で示唆しておいたように(今度は逆に)この charme には「クマシデ charme」が掛けられていると思われる。
- (21) 問題の「老木」は、前掲のデュガが報告している下書き稿では(こちらは複数形で)「老人たちの髭のように白い苔で覆われたこれらの大きな木々」となっていて(op. cit., p. 159), ここから考えると、この「白髪 [tête chenuel]」(文字通りにはむしろ「白頭」)の具体的イメージもよくわかる。
- (22) ここで、「私」が明らかに「鳥」の位置に置かれて眺められていることには注目すべきであろう。ここで生じているのは、〈私の現在〉からの離脱だと言える。まず、私は自分を、他者であるかのように自分の外に眺めている(或いは、同じことだが、他者である鳥の運命を自分の運命に重ね合わせている)。次に私は、私の過去の行動によってすでに起こってしまったこと、すなわち現在の行動ではないものを、これまた現在の行動ではないもの、すなわち自分の未来へと投影して眺めている。一方に、現在における、なしうるといふ感情の充実——これは、すぐ前に描写されている、全豊かさを包括する現在の風景の充実に反映されている——があり、他方には、現在を離脱した想念がある。そしてこの後者が、続いて述べられるように、私に眩暈を起こさせる必然性の幻想を生むのである。
- (23) 「開始すること・始めること [commencer]」と「継続すること・続けること [continuer]」との対照は、『知の問題』「第三部」でより複雑なかつ

ちで反復される。「結局、開始するものはいつでも何かを継続しており、開始するものは、この何かのなかに先在しているのだから、絶対的に開始するのではなく、或る新しい様態で存在し始めるのだということになるう」(CE, p. 44 ; R, p. 43)。「私のうちで、継続するものとの対立において開始するものを区別する、或いは開始するものとの対立において継続するものを区別するやいなや、或る意味で、私自身が開始する」(CE, p. 45 ; R, p. 44)。

- (24) « Ah ! quelle idée ! Quelle vision ! » ここで quel(le) は、むしろ、嘆賞の意ではなく、驚きあきれる意でのそれである。また、vision は和訳が難しい多様なニュアンスを持った語である。
- (25) « d'avoir été fait ».
- (26) « agir ».
- (27) 移ろいゆく絵に一喜一憂するだけのこのような「私」であっても、少なくとも私の現在の存在をしるしづけることだけは確実にできるはずとも考えられるのだが、ルキエにとっては、真の「私」は自由な行為においてしか獲得されない。「その現在の存在のかくも儂い感情が二重の無 [すなわち、私が何もしなえなかった過去と私がなにもしなえないであろう未来] に抗して守ってくれたこの私がたとえ永遠的なものであろうと、行為するために私のうちに目覚めて《さあ行こう！》と叫ぶもう一つの私、自分を失うことを切望し自分を失うことで私を復活させるこのもう一つの私と比べれば、この私、自分が存在するのを感じるにとどまり自分が在るがままに在るのを見るにとどまるこの私は、その惰性的な存在において、その非能動的な存在感情において、いまや私の目には影でしかない」(CE, p. 45 ; R, p. 45)。
- (28) 一切が必然的であれば善と悪とは等しいものになる。ここにはルキエの以下のような基本的な考えが反映されている。自由がなく、いっさいが必然的なのであれば、私が或ることを排して或ることを肯定することや或ることを排して或ることを選ぶことも、ただ必然的にそうさせられている以上は、真理の肯定や善の選択としての意味をまったくもたない。だから、私の自由は、真理と善、知と道徳が私にとって意味を持つための条件であり、或いはむしろ「要請」である (次註をも参照)。

なおまた、「幹」や「樹液」といった形象は、本テキストの主要な舞台装置「クマシテ」そのものがそうであるように樹木に関わる形象である

が、樹木のイメージはルキエにとって小さくはない執着の対象であったようである。その証左として本テキストと並んで挙げられるのは、ルキエの絶筆と目されている「最後の頁 [La dernière page]」(CE, p. 492 ; R, pp. 323-324) であろう。ここでは、北方の海辺の荒野に立つ一本の松が一つの自己の生の形象化そのもののようにして描写されており、樹木にまつわる諸形象が総動員されている。「最後の頁」を試訳のかたちで下に提示しておく。

### 最後の頁

私は干涸びた土地を見る。土地の真中に、石と砂利に取り囲まれて、孤独な松が見える。松は風に、海風に打たれている。その梢は傾き、葉は黒ずんでいる。松はもみくちゃにされている。揺すぶられた、海風に揺すぶられた松の枝の乾いた冷たい騒めきが聞こえる。

梢は傾き、幹は粗いが、幹の下には希有で貴重な樹脂が流れ、大地に落ち、失われるにまかせられる。樹脂は燐光を發し、燐光は白い霧と混ざり合う。

松は、自分の樹脂を取り、鑄型に入れ、それで光をつくらなければならない。もし樹脂をこのまま流れて失われるにまかせると、他の者たちがそれを取り、鑄型に入れて、白い霧でいっぱいになった偽りの光をつくるだろう。その光が諸対象の形と色とを区別させてくれることはないだろう。

もし松が自分で樹脂を集めて鑄型に入れるなら、樹脂は、樹脂が照らしうるままに照らすだろう。樹脂は、比類のない生きた閃光を投げ、それから、少しずつ幹を上り、枝々に拡がり、いたるところを循環し、樹木全体が光り輝くようになるだろう。

そうせずに、樹脂を消え去らせるなら、松は消え、最後には深い闇のなかに落ちるだろう。

松が投げる光はオレンジ色だ。松は風に揺すぶられている。この松の周りでは、全ての木々が倒れてしまった。

梢の先端に、私は一滴の燐を見る。一滴の燐は落ち、その代わりに一滴の血が見える。

この枝は、血の滴る傷口を隠している。その傷口とは、獐猛さだ。

この枝は獅猛さで一杯になっている。

血の滴は落ちようとし、木は自分の枝を伸ばす。枝がもたげられれば、滴は落ちないだろう。枝が擡げられ、血の滴が落ちなければ、この枝は或る大きな光を生みだすだろう。もし血の滴が落ちれば、滴は落ちながら燐光の一部を消すだろうし、枝は、火を生みだす代わりに、血しか生みださないだろう。

自分の枝をもたげよと、木に言わねばならない…。

- (29) ルキエにとって、自由は自由によって肯定される（主張される）のでなければならぬ。私が自由を肯定するのは自由によってであり、それはそれ自身自由な行為である、というのでなければならず、そうであることは自由を肯定する当の行為そのものによって要請される。

ルキエが遺稿のなかで繰り返し確認しているところでは、「私は自由である」も「一切は必然的である」も、証明不可能な命題である。これは時間をめぐっての古典的な逆説に関わる。私が何をなそうと、私のなすことはなされてしまい、当の一つであって他ではない既決事となるのだから、私には別様にもできたはずだ、とか、別様にもできた私が、しかしこの一つの行為を選んだのだ、とかいったことは、証明不可能なことである。「できたはずだ」と考えてみても、そのことが実際に実現されなかった以上、それが実際に可能であった証拠は示されえないからである。他方、一切は必然的である、ということも、(少なくとも我々人間の視点から)未決と思われる未来を消去しえない以上は、証明不可能である。ルキエにとって、自由と必然性とをめぐって問題になるのは、証明ではなく、主張であり、要請である。

ルキエの基本的な考えは、図式的には以下のように整理されうる。自由と必然性に関して、私の主張の身分には四つのパターンが想定される。すなわち、私が自由と必然性について主張を行なっているとき、私が実際に遂行しているのは、1)自由に自由を主張する、2)自由に必然性を主張する、3)必然的に自由を主張する、4)必然的に必然性を主張する、という、この四つのいずれかであると考えられる。このうち、三番目と四番目においては、私が実際に自由であるか否かには拘らず、私の主張は主張としての意味を持たない。仮定からしていっさいは必然的である以上、私は事柄の真偽を区別して真なるものを選んでいくわけではなく、ただ必然

的に或ることを語らされているだけだからである。尤も、三番目の場合には私は偽を語っていることになるのに対して、四番目では真理が言われていることになるわけではあるが、真偽の区別も善悪の選択も私には不可能なことである以上、三番目の場合に特に私が「間違っている」ことにならないと同様、四番目の場合に特に私が「正しい」わけでもないのである。また二番目においては、主張は主張として成立していることになるが、仮定からして私は自由であるのだから、私は真ならぬことを主張していることになる（実は私は、主張そのことをもっていわばパフォーマンスに暗に自由を肯定してもいるのだが、もしそれだけで真理に近づけるのであれば、およそ主張一般が無差別に真理の肯定でもあることになる）。従って、主張が主張として意味を持ち、かつ、その主張内容が真でありうるのは、一番目のやり方にあつてのみであり、もし自由が主張され肯定されうるとすればこれだけが唯一の仕方なのである。また逆に、私が自由を主張している際、その主張の実際の身分の二つの可能性を吟味してみるなら、私は自由の主張において「間違う」惧れはないことがわかる。もし私が実際には自由ではなく、必然的に自由を主張しているだけだったとしても（第三の場合）、それは私の「間違い」ではないからである。他方、私が必然性を主張するなら、私には、真理を「主張」している可能性がないのみならず（第四の場合、主張としての主張はそもそも成立しないから）、誤りを「主張」している可能性がある（第二の場合）。かくて、必然性と自由との二者択一的な主張において、真理を目指すかぎりにおいて採られるべき選択は一つしかないわけである。遺稿に見られるルキエの図式 (CE, p. 398), またルヌヴィエが、自ら編集した『第一真理の探求』の註でルキエの遺稿を引きつつ丁寧に説明を加えている部分 (R, p. 65) を参照。